
怨嗟

平維茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怨嗟

【Nコード】

N0942X

【作者名】

平維茂

【あらすじ】

カオスから生れ出でた世界

光の届かない世界。想像を遙かに超えた遠い宇宙の果てを彷徨う気球の中か、あるいは深海を漂う地底から湧き出た気泡の中なのか。ただ、聞こえてくるのは規則正しく何か打つ音と流れる音だけである。

ドククン、ドククン、ドククン・・・
サアー、サアー、サアー・・・
ドククン、ドククン、ドククン・・・
サアー、サアー、サアー・・・

その闇の世界に微弱に動くものが有る。自然の摂理により発生した生命体。

顕微鏡の中だけでしか見ることが出来ない程の小さな生物。微生物と云って

も過言ではない。しかし、細胞分裂を始め、時とともに有機体として成長し

小さな生き物へと変容していく。その変容とともに徐々に精神をも宿し、

思考力が備わってくる。備わったと云うよりは成長に比例し失われていた

思考力が復活してきたかのようにもある。

「ここは何処なのだろうか。何故ここにいるのだろうか。ここに来る前は

何処に居たのだろうか。思い出すことが出来ない。思い出そうとしても思

い出せない」

光の差さない暗闇の世界ではあるが、恐怖など全く感じさせない至福の世界である。

ドクン、ドクン、ドクン・・・

サアー、サアー、サアー、・・・

ドクン、ドクン、ドクン・・・

サアー、サアー、サアー、・・・

途切れることなく、聞こえて来る規則正しい音の周波数がこの小さな生き物全体を

包み込み至福の世界に導いている。うとうととした心地良い眠りの世界に浸らせ、

時たま精神が目覚め、再び安心してまた恍惚の眠りの世界を漂う。

今はこの生き物

にとつてここは観念のない至福の世界である。時が過ぎると共に小

さな生き物は更

に成長を続け、体も僅かに動くようになり、思考力が増し、感覚も鋭くなってきた。

「傍で何かが動いている」

何か触れ合うものを感じたが、不安はなかった。言葉ではないが、精神から発せられるテレパシーで会話するかのようにして、それを探った。

「何かいるのかな」

「いるよ」

「そう。なんなの」

「そちらこそなに」

「分からないんだ」

「同じね。分からないの」

「何処から来たの？」

「分からないわ。気が付いたらここにいたの」

「それじゃあ同じだね」

「ここが何処分かるの」

「分からない」

「でも、ここはとても気持ちがいい処ね」

「そうなんだ。とても気持ちが良いんだ」

「これからもここにいたいわね」

「そうだね」

僅かばかりの成長でまだ同一性の認識もなく、語彙の少ない、たわいの無い交信であった。幼い二つの小さな生き物は悦びを求めるかのよ

うに
再び眠りの世界を漂った。

ドックン、ドックン、ドックン・・・
サアー、サアー、サアー、・・・
ドックン、ドックン、ドックン・・・
サアー、サアー、サアー、・・・

時折、眠りから覚め、再び相手の存在を確かめるかのように交信した。

「何時も何か聞こえているね」

「聞こえているわね」

「とても良い音だよ」

「この音が聞こえていると、安心していられるわ」

「そうだね」

二つの生き物はうとうとと眠りの世界を出入りし、至福の時が過ぎ
ていった。

ほんの少し時間が経過したであろうか、何処か遠くから何時もとは
違った聞

慣れない激しい音が何度も聞こえ、暗闇の世界が大きく何度も揺れ、
世界全体

が圧迫され押し潰されるかのように感じ、打つ音が激しくなり、流
れる音が

早くなつた。

ドク、ドク、ドク、ドク・・・

ザー、ザー、ザー、ザー・・・

ドク、ドク、ドク、ドク・・・

ザー、ザー、ザー、ザー・・・

「何だか怖い」

「とても怖いわ。どうなるの」

「分からない。でも怖いよ。怖いよ」

至福の世界にいる小さな生き物は一転して今まで感じたことのない恐怖と云う

感覚に襲われた。観念のない暗闇の世界で過ごしてきた小さな生き物が何故怖

いと感じるのか、何時もと違った環境の現れで恐怖を感じるものなのか、

元々備わっている潜在的な精神が危険を察知させたのか定かではなかった。程な

くして遠くに聞こえていた音と激しい揺れは収まり、圧迫感も無くなり、

元の穏やかな流れる音と打つ音に変わった。

ドククン、ドククン、ドククン・・・

サアー、サアー、サアー、・・・

ドククン、ドククン、ドククン・・・

サアー、サアー、サアー、・・・

「とても怖かった」

「何だったんだろう」

元の穏やかな音に戻ると、さっきまでの恐怖が嘘のように消え去り、再びうとうとした眠りを繰り返し、至福の世界に入り込んだ。しかし、小さな生き物ではあるが、精神の片隅の何処かにその恐怖心が焼き付けられ、再び何かが起こるのではとの不安が残り、至福の眠りの中でも時折うなされることが有った。時が経過し、有機体がまた少し大きくなった。

「揺れて気持ちが良い」

無重力の世界にでも浮いているかのように感じ、その適度の揺れが心地よさを増幅させた。

「このまま何処かに行くのかしら」

「ここにいるよ。これからも。ここが一番良いんだよ」

確信が有った。二つの有機体はこの暗闇の世界の何処かと細い絆で繋がっていた。ここはえもいわれぬ心地よい世界。うつらうつらとして、ただ時の流れに任せる世界。時が経過し有機体が成長するとともに生き物としての同一性も僅かではあるが現れてきた。それは忘れ去られていた、遠い昔の記憶が少しずつ蘇ってくる過程のようでもあり、自我の目覚めでもあった。

しかし、それからは打つ音と流れる音が激しくなる周期が短くなり、その度ごとに得体の知れない不安と恐怖が襲った。

「やはり何か変だよ」

「とても怖い」

「怖いよ」

激しい音とは別にこの世界と生き物を繋いでいる絆を通して底知れぬ恐怖が有機体に伝わり、その度に動悸が激しくなり生き物達は震え、もがき苦しみ、言葉を失い泣き叫んだ。

キー、キー、キー……

この暗闇の世界と繋がっている限り、彼らには逃れる術は無く、恐怖に耐えるしかなかった。

更に時が経過した。

ドク、ドク、ドク、ドク……
ザー、ザー、ザー、ザー……

前にも増して、音の激しさが増した。それと同時に今まで聞いたことのない音が外の世界から聞こえてきた。遠くからではなく、すぐ傍から

聞こえてくるようで鮮明であった。

ガチャガチャ、ガチャガチャ……
ガチャ、ガチャ、ガチャガチャ……

一瞬、打つ音と流れる音が穏やかな調子に戻った。

ドックン、ドックン、ドックン・・・
サアー、サアー、サアー、・・・
ドックン、ドックン、ドックン・・・
サアー、サアー、サアー、・・・

しかし、聞こえてくる音は今までとは違い、何故か弱弱しく響き、その弱さが返って不安に陥らせた。

「何か変よ」

「大丈夫だよ」

そう言ったものの、これから先に起こる恐ろしい運命を予感したのか、恐怖で有機体が小刻みに震えた。すると、遠くに丸い小さな穴が開き、

眩しい光が射しこみ、暗闇の世界を何かが窺っていた。とその時、今まで聞いたこともない音と共に、何かが近付いてきた。

シューシュー、シューシュー・・・
シューシュー、シューシュー・・・

「アッ。引っ張られる」

「私も・・・」

何かが体に吸い付いた瞬間、吸い付かれた部分が引き千切られ勢いよく

吸い込まれていった。それは凄まじい吸引力を持った細い金属の管であった。

「痛い、痛い、痛いよ」

「ギャー……」

「キヤー……」

暗闇の中には悲鳴だけが残った。

一体がバラバラに引き千切られ、吸い込まれるには時間を要しなかった。

残りの一体も同じであった。

シュー、プシュ、シュー、プシュ、プシュ、プシュ、シュー……

一瞬の惨劇であった。有機体が引き千切られる瞬間の痛みは小さな命には

当然耐えられるものではなく、また抵抗する術などなかった。金属

の細い

管は恰も柔らかいゼリーを吸い出すかのように全てを吸い出し、残存物が

無いのを確認し終わると、金属の管は暗闇の世界から消え去り、丸く開い

ていた穴も閉じられ、何もなかったかのように、元の静かな世界に戻った。

そこには今までいた小さな生物の有機体の一片の欠片も残っていないかったが、

惨劇の跡を残すかのようにどす黒い液体が滲み出て、外の世界にも漏れていた。

こうして小さな有機体は細かく引き裂かれ、管からパイプを勢いよ

く通り葬り去られた。

「終わりましたよ。まだ麻酔が効いていますから、痛みは感じません。

鎮痛剤の処方箋を出しておきますので麻酔が切れて痛みを感じるようでしたら、

飲んで下さい。暫く安静にして、ここ一ヶ月は無理をしないで下さいね。

それとパートナーとのセックスもですよ」

細い金縁のブランド物のメガネを掛け痩せてほっそりとした、三十前と思われる

女医が神経質そうな表情を言った。

「はい。先生」

女は朦朧としていた。

「暫くは多少の出血が有るかもしれませんが、直に治まります。

もし、激しい痛みを感じたり、出血が続くようでしたら、また来て下さい」

「分かりました。先生」

女は虚脱感を感じ、俯いたままで返事をした。

「あなた、まだ高校生じゃないの……。中絶は初めてじゃないよね。

今の時代、よく有るのよね。セックスはするなどは言わないけど、避妊はちゃんとしないと。協力してくれないパートナーだったら

いくら好きな相手でもセックスはしないことね。もつと自分の体を大切にしないと。産めるなら良いけど、産めない子供だったら被害を被るのは女なんだから。それに胎児と云っても一つの命なんだから、大切にしないといけないわ。それに何度も中絶を繰り返すと、その内に産めない体になってしまうわよ」

「.....」

女は女医の忠告を内心「うざい」と思いながらも頭を下げ、看護師に抱えられるようにして処置室を出て行った。

「眩しいよ。ここは何処なの」

「分からない。痛い、痛いよ」

今まで暗闇の世界に居た小さな生き物達であった。

無残にも体は跡形も無くバラバラに引き千切られ葬り去られたにも拘わらず、無くした筈の体全体に激しい痛みを感じていた。

「キヤツキヤツキヤツキヤー.....」

傍で、異様な笑い声がした。

「誰だよ」

「俺か。俺はお前たちの兄貴だよ」

「あにき?」

「そうだよ。でも驚いたよな。一度に二人が出て来るなんて。」

双子の弟と妹だったんだ」

「ふたご・・・？」

「お前達にはまだこの世界のことは分からないだろうけどな」

「このせかい？」

「そつだよ。この世界。人間の世界だよ」

「にんげんの・・・せかい？」

弟と妹は痛みに打ち震えながら、兄の言葉に聞き入っていたが、この世に送り出されたばかりで、状況が理解できなかった。

「何か動いているけど・・・」

彼らはたつた今、産婦人科の処置室から出てきた女の腰にしがみ憑いていた。

「これか？　これが人間だよ。俺やお前たちの母親になる筈だった女だよ。」

お前達は今までこの女の腹の中にいたんだよ。まともなら赤ん坊として生

まれてくる予定だったんだ。でもよお、今回も俺の時と同じように、お前らも殺やられちまったんだよ」

「ははおや？　あかんぼう？　何のこと？」

「やられちまったって？」

「そうだよ。闇に葬り去られたんだよ。殺されたってことだよ。まだお前らには分かんないだろうけどな。でもなあ、俺達の体は葬られても、魂が有るから、この女に取り憑いているんだよ。この女や他の生きている人間には俺達の姿は見えないんだよ」

「ころされた？ たましい？ いきているにんげん？」

「全然分らないよ」

「まあ、この世界のこと俺が教えてやるから、直ぐに分かるってとにかく、俺達は殺されずに無事に生まれていりゃあ、奴らと同じ人間になる筈だったんだよ。殺される時はお前達も体が引き千切れ、

痛かっただろうよ。俺の時も同じだったよ。痛くて、痛くて、我慢出来なかったよ。叫んでも誰も助けてくれなかった。今でもその痛みを引き摺っているよ」

そう言つて、兄は悲痛な顔をした。

「そうなんだよ。とても痛くて。今でも痛くて我慢出来ないよ」

「痛くて耐えられないの。この痛みは何時まで続くの」

「残念だけどなあ、この女の寿命が尽きてあの世に戻る時までだよ。この女があんたの世に戻る時に一緒に付いて行くんだよ。あの世に戻ればこの痛みはなくなるよ」

「じゅみょうつてなんなの」

「この世で人間として過ごす期間のことだよ」

弟と妹はまだ理解出来ない様子で、不思議そうに首を左右に振っていた。

「あのよとかへ早く戻れないの」

「そうだな……。俺達に出来る事は奴の体を痛めつけて、病気にさせ寿命を縮める事ぐらいだよな。それに自殺でもされたら大変だよ。それこそ、未来永劫、あの世に戻れず、この女の魂とこの世を彷徨い続けなくてはならなくなっちまうよ」

弟と妹にはまだまだチンプンカンプンであった。

「お前達にはまだ分かんないだろう。俺もこの世の事が分かるまで時間が掛かったよ。この女の首筋を見てみな。もう一人、仲間がいるよ。あいつが俺に教えてくれたんだよ」

その仲間は、邪気を孕んだ表情で彼らを見下ろしていた。

「あれはこの女に最初に殺^やられた奴で、俺たちの姉貴だよ」

「あねき？」

「そう、俺達の姉貴だよ」

「そうだよ。私がお前たちの姉だよ。この女はどうしようもない尻軽だよ。」

次から次に腹の中で殺しやがって、平気な顔をしてやがる。私達をなんだ

と思ってるんだよ。お前達。これからもこの女を恨み抜いて徹底的に痛め

つけてやるんだから。私の指図通りにするんだよ。分かったわね」

首筋に取り憑いている姉貴の顔も苦痛で歪み、目を引き攣らせ、恐ろしい形相で、吐き捨てるように言った。

「分かってるよ。姉貴。なあ、お前達も俺達と一緒にこの女を痛めつけるだんぞ」

「うん」

弟と妹は揃って頷いた。二体、否、弟と妹にはまだ意味が分からなかったが、そうしなければならぬと思った。あの至福の世界から一転して体を葬り去られ、苦痛を背負わされた恨みは必ず晴らさなければならぬと。

「また、遣ってしまったわ」

女は麻酔の切れ掛かった体を引き摺るようにして、歩いていった。

「まさかまた妊娠するなんて思わなかった。女は損よね。相手が分かっていれば今回の中絶費用をせしめる事が出来ただけだ。絶対にあいつの子供だと思っただけだ。あいつ、私が複数の男と付き合っていること知っていて、『絶対に俺の子じゃない！』って言って逃げやがったよ。それに、妊娠しているのが分かってから、もう妊娠する心配がないから遣らせるなんて言って、とんでもない奴だよ。

でも、本当、今回もクラスの連中がカンパしてくれて助かった。ぎりぎりでご間に合った。少し遅ければ大変な事に成っていたところだっ

たわ。

ダチに感謝しなければね。でも、当然よね。私もダチに頼まれた時は何度もカンパしているんだから。お互い助け合わないとね。持つべき者はダチだわ。バイトで稼いだら、少しは皆に何か奢らないと、次も有るかもしれないしね」

「チエツ、この女、強かも良いところだよ」

「まだ懲りてねえよな」

「絶対、許せねえよ。とことん痛みつけて苦しめ抜いてやる」

キーキーキー・・・

キャツキャツキャツ・・・

毛のない、生まれたての尻尾のない鼠の子供のようなものが四つ、不気味な鳴声を上げながら女の背中を這い回っていた。

(後書き)

79号全作家掲載作品です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0942x/>

怨嗟

2011年10月9日15時51分発行